

## 東日本大地震時女川原発で放射線量急上昇はやはり同原発起源だった

—東北電力のデータを基にした私達の質問に回答できず—

三陸の海・岩手の会 永田文夫 北本誠一

14年前になろうとする東日本大地震時3月12日に女川原発敷地内のモニタリングポスト（以下：MP）で放射線量が急上昇しました。この原因は120km離れた福島第一原発事故(以下:福一事故)による放射線の雲（以下：プルーム）によると国や電力が説明してきました。

当時はこの世界史に残る福一重大事故による各地の放射能汚染、そして連続する水素爆発、16万にも登る避難民等による大混乱の最中、女川原発は重大事故にならず良かったとの思いでした。しかし、3月12日深夜からの女川原発MPが急上昇しているグラフ（図1）は本当に福一起源か、疑念が払拭できずこの13年間資料を集めてきました。

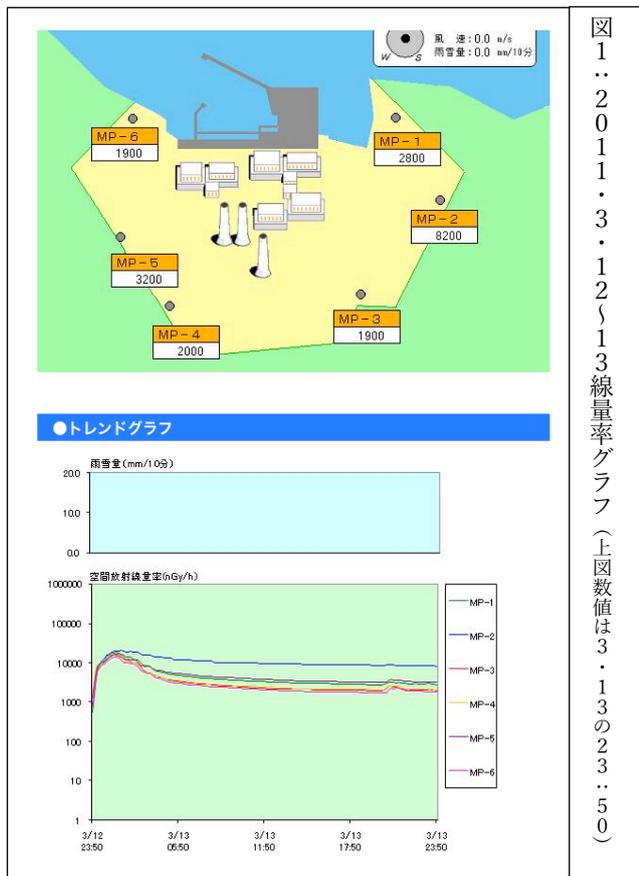


図1 2011.3.12(1)線量率グラフ(上図数値は3.13の23.50)

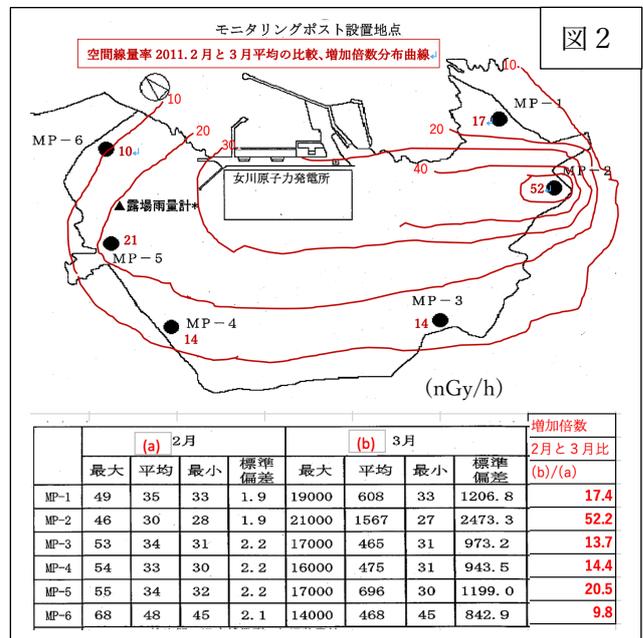
### 論点1：空間線量率のグラフの形がおかしい

プルームが去ると普通は線量が下がるはずなのに雨が降っていないのに何時まで経っても下がっていません。福一からながれてきたプルームが

停滞していたのでしょうか？。

### 論点2：MP2を中心に汚染が広がっている

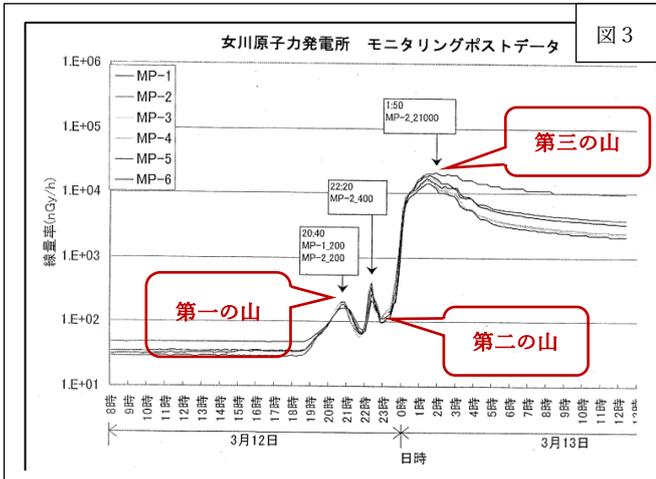
女川原発環境放射能及び温排水調査結果（平成22年度第4四半期 宮城県）の資料4（5）に東北電力測定的女川原発各MPの空間線量率の測定結果が出ています。2011年2月の平均と3月の平均を比較した増加倍数を表の右に記し、これを基に原発敷地内の地図に増加倍数の等倍数線を引いてみました。（図2）



明らかにMP2を中心に放射能汚染が広がっていたことがわかります。福一起源ならば福島方向からのプルームに沿った形の増加倍数の分布になるはずですがそうはなっていません。敷地外の空間線量率のデータはなく、上記調査結果資料の61頁に掲載されている積算線量測定結果を基に2月と3月を比較したところ、小屋取5.3、女川2.8、萩浜4.2、塚浜5.5、寺間5.3、江島5.6、前網6.7倍になりやはり原発を中心に3月の平均値が高くなっていました。計算法やモニタリング位置など詳しくは末尾に挙げた添付資料URLをご覧ください。

### 論点3：距離による線量率低下が見られない

空間線量率の急上昇が福一原発 1 号機の水素爆発によるプルームとすると福一から距離による変化（線量率の低下）の値として MP 2 の  $21 \mu\text{Sv/h}$  はあまりに高すぎます。実はこのことに気がついたのは東北電力 HP の 3 月 13 日の緊急情報の添付グラフでした（図 3）。線量率が急上昇する



前日 12 日の夜に 2 つのプルームが通過していたことがわかったからです。

公開データから福一 1 号機の水素爆発時その影響と思われる地点の距離と空間線量率を表 1 にまとめました。95km 離れた東北大学病院の測定データを見ると 3 月 12 日 23 時に最大  $0.8 \mu\text{Sv/h}$  のプルームが来ていたことがわかりました。120km 離れた女川原発が 24km 離れた南相馬より高いことは不自然です。図 3 にある女川原発の第二の山の値  $0.4 \mu\text{Sv/h}$  が自然です。この表をグラフ化したものは末尾添付資料 URL をご覧ください。以上の論点等を質問としてまとめ 10 月 5 日東北電力に提出。電力は電話回答で済ませたいとの意向でしたが、再稼働を前に丁寧な説明をと要求し

測定地点	1号機からの 空間線量率		表 1
	距離 (km)	( $\mu\text{Sv/h}$ )	
6号機モニタ	0.7	4000	
MP-4 付近	1.1	1000	
双葉町郡山MP	3.0	1600	
浪江町幾世橋MP	8.5	30	
南相馬市	24	20	
東北大病院	96	0.8	
女川原発	120	21	0.4 (第二の山)
岩手県滝沢市RMC	269	0.28	

11 月 18 日電力本店で口頭回答を得ました。

◎ 東北電力の回答：論点に一切答えず「冷温停止、排気筒モニタ値低かった」との繰り返し

MP 線量急上昇の原因は女川原発と考えられるとした、私達の論点の否定は一切なくただ「各号機は冷温停止していた。排気筒モニターが少し上昇したのみだ、福一の影響と考えている」とし、論点に係る私達のデータの考察については「一概に言えない」の回答が繰り返されるばかりでした。「3 号機のブローパネルが外れていたが排気筒以外にも放射能の放出はあるはず」の質問に答えず。「福一の影響」と言い切らず「影響と考えている」との答えは、電力側が私達の論点を覆す根拠がなく、自信のなさの現れと思いました。電力内部のモニタデータにより私達の論点を覆すことができるはずですが、それができないことは、やはり女川原発内の事故により発生したプルームにより MP の線量率が急上昇したことを示唆するものと判断しました。電力会社自体が測定したデータについての考察を「一概に言えない」で済ませずにはモニタリングデータ評価の意味がなく、非科学的姿勢に疑問を禁じ得ませんでした。

大震災で福一原発が重大事故を起こし、加えて女川原発までもとなると世界的にも恥であり道路寸断、1 号機火災鎮火対応、MP の線量は低下せず等大混乱の最中の 3 月 13 日に原子力安全保安院と東北電力は「緊急情報」で「女川原発の事故によるものではない」と公表し収拾を図ろうとしたのでしょう。しかし事故後 14 年になろうとする今、女川原発を再稼働させるにあたり、MP 2 を中心とする放射線量率の急上昇の原因について真実を明らかにすることは電力が人々への誠意を示す重要な事柄であったはずですが、このようなことを曖昧のまま済ませ姿勢は深い反省がないことを意味し重大事故の元になります。何と云っても人々の信頼を回復することができません。

電力回答の際には地元風の会から須田さん、服部さんに参加して頂き感謝しております。

\* 質問書・添付参考資料<sup>1)</sup>、Q&A&C 議事録<sup>2)</sup>、は以下

1) <http://sanriku.my.coocan.jp/241005touQ.pdf>

<http://sanriku.my.coocan.jp/241005touT.pdf>

2) <http://sanriku.my.coocan.jp/241118Q&A&C.pdf>